

# 日本で見られるコブハクチョウは在来種？ 外来種？

## はじめに

富士山を背景に湖に浮かぶコブハクチョウ *Cygnus olor* (図1)。このような光景は山梨県山中湖で一年を通して普通に見られ、観光客の多くはこれらを野生個体だと考えているようです。しかし、ここでくらししているのは、50年以上前に山口県から観賞用に持ち込まれたものの子孫だと考えられ、現在は、50羽ほどが湖で放し飼いにされています。

本種はカモ目カモ科に分類される大型の水鳥で、ヨーロッパ中西部をはじめ、中央アジア・モンゴル・バイカル湖東部・ウスリー川流域などに分布しています。日本では、まれな迷鳥としてこれまで2回記録があります(日本鳥学会, 2012; 富沢ほか, 2023)。冬鳥として渡来する他のハクチョウ類と異なり、嘴がオレンジ色で根元に黒い瘤があるのが特徴です。

## コブハクチョウは在来種？

毎冬、環境省により行われているガンカモ類の生息調査によると、コブハクチョウは、沖縄県を除く全国の湖沼等で記録されています(環境省生物多様性センター, online)。山中湖のほか、青森県小川原湖や福島県松川浦・茨城県牛久沼・千葉県手賀沼ではまとまった羽数が生息しており、繁殖が報告されている湖沼もあります。日本では迷鳥とされている本種が、なぜ全国に定着をしているのでしょうか。実は、これらの大半は、観賞用に放されたものが逃げ出し野外に定着をした個体とその子孫たちだとされており、いわば外来種なのです。

そもそも外来種とは、人間の活動によって本来の生息域外に持ち込まれた

生物を指します。例えば北米から日本に持ち込まれたアメリカザリガニ、本州から北海道に持ち込まれたカブトムシなどはすべて、持ち込まれた先では外来種となります。観賞を目的としてヨーロッパから日本に持ち込まれたコブハクチョウも日本では外来種となります。

外来種のうち、人の生活、農林水産業、在来の生物や生態系などに影響を及ぼすものを「侵略的外来種」といい、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」にまとめられ、本種もリストに掲載されています。そして、侵略的外来種は、社会全体で個体数の増加や分布の拡大を抑える対策が求められています(環境省, online)。

本種の影響として、現在明らかとなっているのは農作物被害です。千葉県では、水田に侵入して田植え直後の苗を食べた事例が報告されています(植村, online)。ハクチョウ類は陸上や水中の植物の葉や根を主食としているので、植えられたばかりの稲の葉は柔らかくて美味しいのでしょう。このほか、オオヒシクイ *Anser fabalis middendorffii* と生息場所を巡る競合や、水生植物群落への影響が懸念されています(我孫子市鳥の博物館, online; 環境省, online)。

## 日本での導入の歴史

本種は、古くから動物園等で飼育されてきました。国内で初めて野外に放されたのは1957年で、皇居外苑の濠に上野動物園から15羽とドイツのハーゲンバック動物園から9羽の計24羽が導入されました。現在は5羽が飼育されており、これらはすべて飛べないよう処置されています。

1975年には北海道大沼公園に一番が放され、翌年には8羽の雛が生まれました。そのうち1羽は動物園へと引き取られ、残り7羽はそのまま公園で放し飼いにされていました。ところが1977年に公園からいなくなり、代わって北西に45 kmほど離れた八雲町に7羽が現れました。出現状況から大沼公園のものと同個体である可能性が高いとされています。その後、これらは行動を共にし、室蘭港、苫小牧市ウトナイ湖へと移動しました。そして、1978年にはウトナイ湖で繁殖を始め、1987年6月には約90羽まで増えました。増加の原因として新たな個体の導入も考えられますが、繁殖状況から自然増の可能性が高いとされています(大畑, 1987)。さらに標識調査により、この個体の一部が茨城県北浦地区に渡り越冬していることが確認されました(大畑, 1987)。この記録は、野外へ導入された本種が、



図1. 山中湖のコブハクチョウ。2023年11月20日, 重永明生撮影。

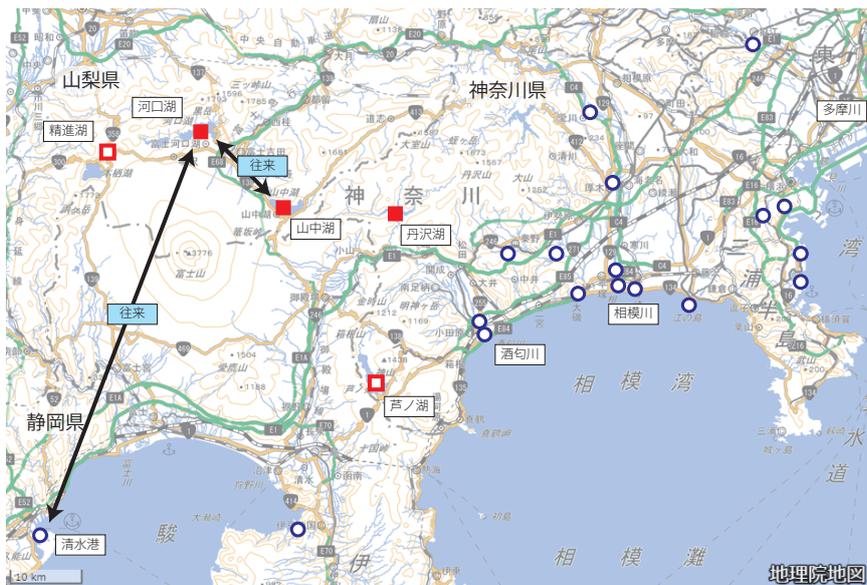


図2. 神奈川県及びその周辺地域における野外でのコブハクチョウの分布状況。■は現在定着が確認されている湖沼, □はかつて定着していたが現在は確認されていない湖沼, ○は一時的に飛来が確認された場所。地理院タイルに地名と日本野鳥の会神奈川支部(2020)及びコブハクチョウ調査グループにより本種が確認された地点を追記して作成。

他地域へと移動、定着、湖沼間で渡りをした初めての事例だと考えられます。

現在、ウトナイ湖では数羽しか確認されていません。寿命が長い種のため自然減ではなく、近隣地域へ移動した可能性が高いと考えられます。実際に、ウトナイ湖で標識を着けられた個体が小川原湖で確認され、雛を連れた姿も観察されています(神谷, online)。

### 丹沢湖や河口湖でも繁殖確認!

これまで神奈川県では、各地でコブハクチョウが確認され(図2: 日本野鳥の会神奈川支部, 2020)、その多くが近隣の湖沼から偶発的に飛来したと考えられていました。ところが、2018年10月に山北町丹沢湖に飛来した1羽はそのまま定着し、翌年には2羽に増え、2021年には県内で初めて営巣が確認されました。しかし、湖の増水により巣は浸水し営巣を放棄、再営巣をするも再び放棄したため、雛は生まれませんでした。

丹沢湖に先立ち2020年に山梨県河口湖でも初めて繁殖が確認され、2羽の雛が生まれました(図3)。ここはまとまった羽数が生息している山中湖に近く、かねてから定着が懸念されていました。翌年も繁殖し、雛9羽が生まれ同所での羽数増加の可能性が高くなったことから、丹沢湖と合わせて標識をつけることにしました。ウトナイ湖の事例から、増殖をした個体が両湖沼間や他地域へ移動する可能性があったためです。

### 標識による追跡調査と繁殖抑制の試み

2021年から2023年までに、著者も参加しているコブハクチョウ調査グループが主体となり、丹沢湖で2羽、河口湖では9羽に首輪や足輪を着け追跡調査を行い



図3. 河口湖で初めて確認された雛2羽。その後、1羽は消失。2020年7月7日、篠田授樹撮影。

ました(図4)。あわせて、ウェブサイト等を通じて標識個体の情報提供を呼びかけました。その結果、数多くの目撃情報が寄せられ、湖沼毎に異なる生活サイクルを送っていることが明らかとなりました。

丹沢湖の個体群は主に湖東側で周年を過ごしていました。番相手は変わらず特定の地点に巣を作るものの、増水等により巣を放棄、雛は生まれず、羽数増加も確認されませんでした。

河口湖の個体群は、湖で周年過ごす個体もいる一方で、山中湖や静岡県清水港へ移動するものもいました。湖全体を利用しており、特に観光客の多い場所の利用頻度が高いこと、番相手が生きているにも関わらず新たな相手と繁殖をした個体がいることなどが分かりました。さらに無標識の個体が一時的に観察されたことから、新たな個体が他地域から飛来していることも確認されました。

同時に、擬卵交換による繁殖抑制も試みました。産卵を確認した後、10日から2週間してから卵を取り除き、同じ数の偽の卵(擬卵)を巣に戻し新たに雛が生まれるのを防ぐ試みです。2022年、2023年に河口湖で実施したところ、親は擬卵を抱き続け、雛は生まれず抑制は成功しました。同様の試みは千葉県でも行われています(植村, online)。なお、手賀沼では山階鳥類研究所と我孫子市鳥の博物館のメンバーからなる「コブハクチョウ標識調査グループ」が、標識調査を行っています(我孫子市鳥の博物館, online)。

### 対策は広域的に

関東・甲信越地方では、山中湖をはじめ牛久沼や手賀沼周辺でまとまった羽数が確認されており、繁殖もしています。これ



図4. 丹沢湖の標識個体。JK66(左: メス; 右足に金属リング装着)とJK67(右: オス; 右足に金属リング, 左足と首にカラーリングを装着)。2022年4月27日, 加藤ゆき撮影。

らの個体は飛翔能力を持つため、他地域へ分散する可能性は十分に考えられます。例えば小田原市酒匂川では、2023年5月に2羽が1週間ほど確認されました。

このような事例は各地で報告されており、放置すれば分布拡大に繋がり、農作物被害等が発生する恐れがあります。それを防ぐには、放し飼いにされている個体に足輪を着け飛べない処置をするなどの管理を徹底することが重要でしょう。そのうえで、飼育個体以外の生息状況を把握しつつ広域で管理、対策を進めていく必要があります。もし野外でコブハクチョウを見かけたら、標識の有無にかかわらず博物館まで情報をお寄せください。

### 引用文献

- 我孫子市鳥の博物館, online. 手賀沼のコブハクチョウ. <https://www.city.abiko.chiba.jp/bird-mus/info2/kobuhaku.html> (2023年9月30日アクセス).
- 神山和夫, online. 移り変わるコブハクチョウの繁殖地. <https://db3.bird-research.jp/news/202310-no3/> (2023年10月25日アクセス).
- 環境省, online. 生態系被害防止外来種リスト. <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html> (2023年9月30日アクセス).
- 環境省生物多様性センター, online. ガンカモ類の生息調査. [https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo\\_top.html](https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html) (2023年9月30日アクセス).
- 日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第7版, xx+438pp. 日本鳥学会, 三田.
- 日本野鳥の会神奈川支部(編), 2020. 神奈川の鳥2011-15—神奈川県鳥類目録VII—, 685 pp. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜.
- 大畑孝二, 1987. ウトナイ湖におけるコブハクチョウの生息状況について. *Strix*, 6: 80-85.
- 富沢直浩・中村正男・Nyambayar Batbayar・Tseveenmyadag Natsagdorj・Otgonbayar Tsend・Park Jin-Young・Kang Seung-Gu, 2023. モンゴル国で標識された野生のコブハクチョウ *Cygnus olor*の石川県における観察記録. *日本鳥学会誌*, 72: 261-263.
- 植村慎吾, online. コブハクチョウ対策の合意形成に向けて 餌やり問題をどう解決する?. <https://db3.bird-research.jp/news/202111-no3/> (2023年9月30日アクセス).

※標識調査及び擬卵交換は、鳥獣保護管理法に基づく許可を受けて実施しています。